

七津大夫（ななつ だゆう）

むかし、天皇の世継ぎのもつれと武士の勢力争いがもとで、戦が続いていたころのことでした。長びく戦のために、京の都の大半は焼け野原になりました。食物もじゅうぶんに手に入らなくなつたうえに、悪い病気がはやつたり、ぬすつ人が出たりするようになつて、街は荒れはててしまいました。

そのころ、朝廷の中納言という高い位の役人で七津大夫という人がおられました。七津大夫は、戦の続く京都がいやになり、そこから逃れて都落ちをされました。そしてどんな縁があつたのかはつきりしません、この土地へやつてこられました。

七津大夫は、又右衛門新田の南にある原の地に立たれて、

「街道沿いで、清水もわき出ていて飲み水に困らないし、そのうえ景色もいい。」

といわれて、そこに住むことに決められました。やがて鞍流瀬川ぎわの見晴らしのいいところに、立派な家を建てられました。

村の人たちは、その家を、

「大夫さまの住む、七津屋敷。」

と、おそれ敬う氣持ちをこめて呼びました。ところが、七津大夫は、いつもきちんとした公家の身なりで、近くの村々のお寺やお宮をお参りして回って、戦でなくなった人々や飢えて苦しんでいる人たちのために、供養をされていきました。その途中で村の人に会うと、

「きょうは、いい天気ですね。よう精が出ますなあ。」

と、氣がるに声をかけられます。また、

「今年の稲の出来ばえはどうですか。雨が少なかつたから心配ですね。」

と、村人のくらしむきにも氣をかけてくださいます。

七津屋敷のそばに、たくさんわき水の出る大清水がありました。七津大夫は、その辺りを整えて、お地藏さんをお祭りされました。ところが、その後、村の人たちのお参りの場所となり、街道を行き来する人々の休けい所ともなりました。

それで、村人たちは、

「大夫さまは、都からござつた、えらいお人だ。」

「身分の高いお人なのに、たいそう親切で、やさしいお方だよなあ。」

「なんでも、謡曲をうたいなさるそうなの。」

などどうわさし合い、「大夫さま、大夫さま。」と、したい、尊敬するようになってい

ました。

ところが、運の悪いことに、ある年の大水で被害を受けて、七津屋敷はこわれてしまいました。

そこで、七津大夫は、

「ここはだめだ。南の高台に移ろう。」

と、スクモの地に、引っ越しされることになりました。このときは、村の人たちも、

「大夫さまの屋敷が水びたしにならないようにしにやならんなあ。」

「もつとええ家を造ってあげなくちゃあなあ。」

と、総出で手伝って、堀や塀で囲まれた城のような大きい家を建てました。

新しくできた屋敷を、みんなは、



「大夫さまの住む、城池。」

と、親しみをこめて呼ぶようになりました。

七津大夫は、村のために、田んぼへ水を引くことを教えたり、病気の人のためにおいのりをしたりしてくださいました。

そんなある日、村の人たちが、七津大夫に、

「おらが村には、まだ名前がにやあ。大夫さま、ええ名前をつけてくださいな。」
と、お願いしました。七津大夫は、ちよつと思案したもの、笑顔を返されただけでした。

その年の村の寄り合いで、村の名前が話題になりました。いくつかの名前が出されましたが、みんなが納得するいい名前は、なかなか見つかりませんでした。そんなとき、ひとりの長老が、

「この村は、大夫さまのおかげでようなつた。どうだろ
う、大夫さまのお名前をい



ただいては……。」

と、いい出しました。

「大夫村か、それはええ。」

「てやあもにやあこというな。大夫さまに迷惑めいわくがかかつちやあいかん。大夫をおおぶおぶとへん呼んだらどうだ。」

「それもそうだ。おらあ、おおぶがええと思うぞ。」

「そうだ、おおぶがええ。」

「おおぶか。それがええ。」

と、日ごろ尊敬している大夫さまにちなんだ名づけだけに、村中おおちの人はみんな大喜びしました。

大府地区に伝わる話です。原は、今の桃山町一丁目辺り、スクモは、中央町一丁目付近にあたります。県道名古屋碧南線沿いの土手のなかほどに、大清水の泉やお地藏さんがあります。大府の地名の由来は、七津大夫にちなんだ大夫が、「大符」となり、やがて、「大府」になったといわれています。大府の地名については、このほかにも、獅子舞の大夫にちなんだいい伝えや、伊勢や熱田神宮のお札にかかわる話が伝えられています。